

令和５年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》

読書活動への扉を開く！

№． 6 1

桑村小学校 令和５年１０月２６日 文責 橋本泰代

ほんとに よかった

ある日私は、「桑村小学校の読書通信に『読書について感じていること』を載せることになった」と家族に打ち明けた。私には、本を読む習慣があまりないことを知られている後ろめたさがあり、ちょっとヒントが欲しい気持ちからだった。

私の読書熱は、親から漫画を読むことをよく思われず、勉強になる本を読むことを勧められた小学校中学年で止まってしまっている。

一方相談相手の夫は、子供の頃からの読書好き。ジャンルにとらわれず、小説・SF・推理もの何でも読んできたと言う。いろいろな本を読むことが、独創性や発想力を生んで役に立つと…

（しまった！このままではこの話の続きは、私へのダメ出しに向かってしまう。）そう思った瞬間、私は一人暮らしをしている息子にも相談したことをすかさず夫に話した。

息子は小さい頃、私が絵本の読み聞かせをしていたことをよく覚えていた。そして学生時代に読んでいた小説は、読解力や想像力が養われる感じがして楽しかったと……あまりの美談に久しぶりに夫と大笑いして相談タイムを終え、私はほっとした。

確かに私は生涯読書量が多いとはいえないが、読み聞かせは楽しくできるという気付きを家族が与えてくれた。

私が息子に読んだ絵本の中に、おだのぶおさんの『ほんとに よかった』がある。息子が通っていた保育園では月に２冊の絵本が家庭に配付された。その絵本の中で親子の一番のお気に入り、『ほんとに よかった』だった。

思い出は大人にとっては過去の出来事にすぎないかもしれないが、子供たちにとってはこれから生きていくことの支えになる大切なもの。

読み聞かせは読書の一番の近道なのかもしれない。ほんとの『ほんとに よかった』

切 り 取 り 線

「読書活動の扉を開く」（１０月２６日号）を読んでの感想

（ ）年（ ）